夭逝の人・森谷延雄

森　仁史

それにしても夭逝の羨ましさよ、と古書を漁る人々には直ちに了解される事情がある。つまり、業半ばにして倒れた若い芸術家には当然有能な仲間があり、彼や彼女の実現できなかった夢を情熱的に書物のなかに描きだそうとすることがしばしばだからである。もう夭折などとは言われなくなるほどに齢を重ねた我らには当然このチャンスは失われてしまっており、せめてかれらによって残された書物を心してひもとくこと以外にないことになる。デザイナーにもこうした幸運を享受したものがいた。

その名を森谷延雄という。森谷は一九二七年に自身が主宰する「木のめ舎」（誤植ではないので念のため）の最初の展覧会〔四月九日～十九日、丸の内丸菱〕開催目前の四月五日に三十三歳にして劇的な死を遂げている。学校を卒業してわずか十余年の活動だった。一九八六年ポンピドゥ・センターで開催された「前衛の日本　一九一〇　一九七〇」展でこの木のめ舎の家具（複製）が展示されたし、その主著や遺稿集の一部が『近代庶民生活誌』第六巻「食・住」（一九八七年、三一書房）に復刻された。その後も、「日本の眼と空間Ⅱ」展〔一九九二年、セゾン美術館〕にも展示され、一九九四年にはBC工房によって家具が復刻され注目を浴びた。死後も戦前期のインテリアデザイナーとしては途切れることなく注目を注がれた作家といえるだろう。

しかし、先にあげたようによく紹介されている一九二〇年代の活動以外については、あまり知られているわけではなく、ここで私なりに彼の生きた時代相と彼の活動の意味を振返っておきたい。それができるのも彼自身や彼にかかわる手掛かりがよく残されているためであって、比較的容易にその足跡をたどることができるのである。ここにも彼の僥倖を見る思いがする。

彼が東京高等工業学校の工業図案科を卒業した一九一五（大正四）年は明治以来の様式や技法の学習が一巡し、そろそろ欧米の同時代の芸術思潮にシンクロしつつ、日本の近代美術が固有の表現を求め始めた時期であった。森谷の仕事は将にこうした時代の求めに沿っているといえる。即ち、彼の仕事は大きく三つの分野に分けられる。第一には古典作品・技法の基礎研究であり、第二には表現として時代的風潮を帯びた作家としての表現であり、第三に同時代の日本の標準的生活への取り組み・関心である。このなかでは、第二の系譜の仕事が注目されてきたわけである。

第一の系譜は在学中からの日本の寺院建築装飾の研究（一九一四年調査、翌年発表）、洋家具の技法研究（一九一六年発表）や留学中のヨーロッパの古典家具研究が挙げられる。最後のテーマは帰国後に一冊の著作としてまとめられた。『西洋美術史・古代家具篇』（大正十五年三月十八日、太陽堂書店）がそれで、ここにはエジプト、バビロン・アッシリア、ギリシャ、ローマ・ポンペイの家具の展開を森谷自身のイラストと写真図版で紹介したものであった。これらは一九二〇年十二月～二二年六月にかけてのヨーロッパ留学中の大英博物館・ヴィクトリアアルバート美術館及び現地の調査の成果であった。この後、中世、復興期、近代の三冊を刊行するとの予告が記されているが、それは果たされずに終わった。

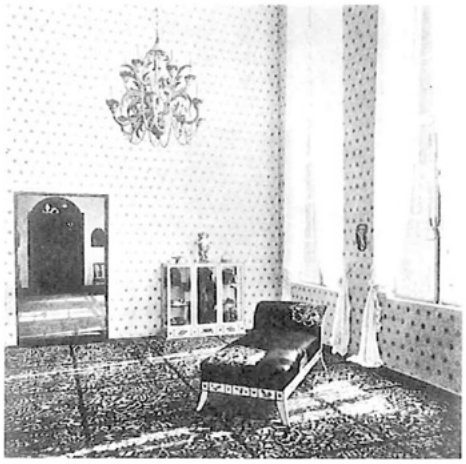
建築よりはインテリアのほうがヨーロッパ学習でやや遅れて後を追っているともいえる。固有のスタイルを模索しようとするときに、和洋の基本や根源をどこに見るべきかに考えが至ったのは理の当然であった。日本でもようやく椅子式生活が手の届くところまで来てはいたが、洋家具といってもその基本スタイルや組み立て工法について家具職人ですら十分な知識が無い時代にあって、こうした分野に啓蒙的な役割をになうことが森谷に

も求められ、またそれを魅力的に仕上げて行く能力も彼には備わっていた。ちなみに、森谷とイギリスで行動を共にすることの多かった宮下孝雄が滞欧中に多くの時間を割いた色彩研究についての著書である『色彩の知識』も同じ書店から刊行されている。

第二の系譜の仕事はたまさか彼の活動が東京を関東大震災が焼き、その後の都市の姿への関心が昂揚し、アヴァンギャルドな活動（当時の呼び名では「新興美術」）すらも、新しいものをつくろうとする人々のエネルギーが呑み込もうとした時代であったことに大きく影響されている。その頃の代表的な作品は一九二五年の国民美術協会第十一回展（竹之台陳列館）出品の家具であろう。ここには「ねむり姫の寝室」「鳥の書斎」「朱の食堂」が出品された。森谷の初期の作品は誠之堂（一九一七年竣工。現在、深谷市に移築）や「S邸室内装飾」（一九一八年、農商務省展）にみられるように、アーツアンドクラフツや分離派風な簡素で直線的な風合いを漂わせていた。日本人が終始一貫して白木造りの家具を好むような、素朴で簡潔な造形を好む気質に近かったといえる。しかも、それがダルムシタットのように理想の芸術郷といった伝説で彩られているなら、なおさら若い芸術家を惹きつけずにはおかなかったであろう。これは森谷一個人の傾向ではなかった。しかし、一九二〇年代のほとばしる自己表出へのエネルギーはもっと直截な表現を求めた。欧米には表現主義の嵐が吹き荒れており、こうした造形に森谷もドイツで接している。今ではすっかり忘れられているが、当時の日本にはT・ペッヘ〔図1〕やR・コズマが大いにもてはやされていたのであった。こうした傾向を最もよく体現しているのが森谷の国民美術展出品作である。これらの一連の作品は『小さき室内美術』（大正十五年一月十日、洪洋社）〔図2〕として出版され、ロマンチックな図面と写真図版によってその詳細を知ることができる。その冒頭には森谷の情熱のありようが短歌に託されている。

たまゆらの命は尊かし工人の
指に築かゝ（ママ）る不壊の城かな

復刻された椅子〔図3〕に見られるように、過剰な生命感とうねりあふれ出すような造形はそれが立体作品であるだけに絵画以上に見る者に大きなインパクトを与える。そして、それらが幾分線の細い森谷の個性にくるまれることによって、全体を静謐な詩情で覆ってしまうのである。このあたりは初期から森谷の持ち合わせていた資質といっていいはずだ。それは同時に、家具造りが共同の手作業に依ることに起因する共同幻想の産物と

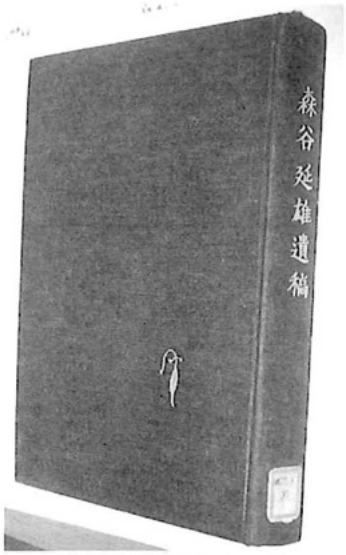


1　T・ペッヘの作品

2　『小さき室内美術』（大正15年、洪洋社）

3　森谷延雄の復刻された椅子

4 『小さき室内美術』の冒頭頁



5 『森谷延雄遺稿』(1928年、同遺稿刊行会)

意識されることも作用しているのかもしれない。この作品集には、「この小さき室をものせる工人の氏名」が総て記されていて、冒頭には「この一片をわが敬愛する工人にさゝぐ　のぶを」〔図4〕と記すことを忘れなかった。いずれにしても、森谷の個性と時代的風潮の危うくみごとなバランスのうえにこれらの作品が成り立っているように思われる。これらの傾向は日本の一九二〇年代のアヴァンギャルドのなかでも大きな血脈をなしているのだが、その過剰な生命感は表現主義の原基として輝いているように見える。

第三の仕事は生活改善の掛け声のもとに、人々の新しい生活スタイルを考えるに際して、合理性・機能性が追求されていくときに求められる家具デザインであった。これには美しく廉価という難しい目標が設定される。この課題は森谷にとっては、全くヨーロッパ留学が起点となったといえる。オーストリアで見聞した勤労者向け集合住宅とその調度はことに印象に残ったようだ。帰国した翌年の一九二三年五月に「新しい家具と装飾の展覧会・標準家具装飾メッセ」〔農商務省商品陳列館〕は木材工芸学会が東京家具装飾協和会と共同して開催したのであるが、前者は森谷の出身校である東京高等工業学校出身者からなるインテリアデザインに関心を持つ学徒の組織であり、森谷はその機関誌『木材工芸』の実質的な責任編集者であった。このとき展示された家具は学会の名で発表されているが、中心になったのは森谷と見て間違いないように思われる。また、二六年十二月には「趣味と実用の新案家具展覧会」が主婦の友社と木材工芸学会によって開かれ、ここにも森谷は出品している。

これら総ての活動の合流点が木のめ舎の活動であり、デザインであったように感じられる。これも『木のめ舎家具作品集』(一九二七年、装飾研究会)として彼の死後に公刊された。そこには、ヨーロッパでの知見と関東大震災後の新しい住宅と生活スタイルへの取り組みが家具の製作の大きな起因となり、また他方では分離派から表現主義を経て実際的な家具(客観的には機能主義への接近)デザインへ大きく踏み出していったすがたが如実に表現されていた。しかし、この木のめ舎の家具には形態を機能に従わせるよりは、美しさを感じとらせようと詩情を漂わせる森谷の意図が働いている。それは森谷の表現主義の残滓とも見える。

さらにその後、『森谷延雄遺稿』(一九二八年、森谷延雄遺稿刊行会)〔図5〕が編まれた。いずれも、森谷の実弟であり東京高等工芸学校の教え子でもあり、さらに木のめ舎の同人でもあった森谷猪三男が学友たちと編集したものである。

こうしてみてみると、森谷延雄は確かに三十路のとばくちで死の旅路に赴いたのであるが、若くして手掛けた大きな仕事はいずれも思い半ばとはいえ、ひとまずの集成に至り、記録が残るべくして残されたのではなかろうか。あるいは、それは年老いた未熟者の繰言なのかもしれない。

一寸

第四号　二〇〇〇年十一月

第四号目次

新・旧刊案内4　『国粋』と『層雲』　青木　茂　1
画博堂――或る画廊先駆者物語――　岩切信一郎　4
残されたひとやま《鉄の橋》
―藤牧版画の後摺りについて3　大谷　芳久　8
目録にない図画教科書（四）
田村宗立『田村画帖』（明治二〇、二一年）　金子　一夫　13
「玉子飯と精錡水」　丹尾　安典　16
司馬江漢作《輿地全図》の周辺
銅・石版画遺聞4　森　登　18
夭逝の人・森谷延雄　森　仁史　22
お札博士スタールの記3
古本歩き・横浜の巻　Ⅳ　山田　俊幸　25

新・旧刊案内4　『国粋』と『層雲』

青木　茂

明治の文芸雑誌には口絵や裏表紙のほかにもところどころに挟まれた一ページ大の木版画が、本文とは全く無関係に挿入されていることがある。新聞の場合はさすがに新年の干支ものや季節感のある図版が多いが、雑誌になると人物、人事、風景、動物など何でもありで、これを何と名付けるか、「コマ絵」「草画」「挿絵」「漫画」などで、今に至るも定称はない。単行本の装釘や雑誌の表紙に多色の版画を使うのがいつはじまりなぜつづいたのか、幕末の絵草紙は多色の表紙で定期刊行物のようでもあったのがそのまま続いたのかどうか、これも定説がない。名前や定説なんてなくても、各々が面白くよく出来ていれば手にとった人は満足するので、作者は冥利に尽きるわけだと言って終えばそれだけである。

織田一磨展をみていたら句誌『東炎』は多色木版の表紙を昭和九年三月から十七年四月まで一磨の三十数点の絵で飾っている。一磨は写生風のまた図案の花や鳥、風景、静物、人形などを年々の主題とし、一年間を二、三ケ月で鵜、インコ、鶯、たげりというように、時に色変りとして楽しみながら評価できる表紙の装釘としている。俳誌『東炎』（昭和七年十一月～十九年五月）の主宰者志田素琴や村山古郷、内田百閒らの同人は、十七年二月号の特輯が「戦争と俳句」だった時代になっても一磨の翁草を表紙としていたのである。僕は『東炎』については何も知らないが、表紙などは原色版印刷の時代になっても、俳誌のなかには木版画に固執する人たちがいたのである。説明なし論証なしで言えば『ホトトギス』と『白樺』の伝統である。また月刊文芸雑誌『国粋』創刊号（大正九年十月）は表紙に夢二の「女面」、折込口絵に一磨の「八木節」〔図1〕をそれぞれ木版十六